

この空を見上げて

沖縄県立開邦高等学校 三年

崎村 陽奈

今私たちは、この沖縄に住んでいる。命の危機とか、明日の食糧の心配とかそんなものとは全く無関係の生活と言ってもいいだろう。しかし、それが当たり前でなかった時があったことを忘れてはいないだろうか。今から六十九年前、ここ沖縄は戦場となり多くの人が命を落とした。私の祖母は戦争を体験している。しかし、二人ともそのことを語りたがらない。私が戦争体験について話を聞こうとしたときも、話そうとはしなかった。その理由を尋ねると、祖母はこう言ったのだ。

「お前たちは戦争のあの恐ろしさを知らなくてもいい。平和な今があるならそれでいい。」その言葉に私はこれ以上言葉を重ねることができなかった。黙り込んでしまった私に祖父は、戦争が終わったと知ったとき、空を見上げたのだと言った。青い、青い空だったと言った。

「あの空をもう恐怖の気持ちで見なくてもいいということが嬉しかった。」

祖父はこれだけ言うともう戦争のことは口にしなかった。

祖父が見上げた空。殺戮の為の空ではなく、喜びのための空。平和を見上げた沖縄の空は祖父が見上げた日と変わらず、今も青く澄みわたっている。しかし、今、今この空が争いに使われていない、と言い切ることにはできない。未だ残る米軍基地からは軍用機が飛ぶ。大きな音を響かせながら。平和を願う声をあげ笑うように、掻き消すように。

私はその音を初めて聞いたとき、それは衝撃だった。親戚の家を訪ねた昼下がり突然爆音が走った。ゴオオオッと凄まじい音が何秒か続き、それが遠くなって完全に聞こえなくなるまで私は身を硬くしたままだった。よ

うやくその緊張から抜け出すことができたとき、私は叔母にこの音について尋ねた。すると彼女は、この音は米軍の飛行機の音だということ、毎日何度もこの音は響きわたるのだということ、彼女に教えてくれた。そして彼女はこう言ったのだ。

「もう、慣れたから。」

その言葉に、私はあの爆音と同じくらい衝撃を受けた。慣れて日常化してしまったあの爆音。では次は何が彼らの日常になるのだろうか。飛行機の墜落に怯える日々か。それとも住宅地すれすれを飛ぶ飛行機の近さだろうか。何も彼らの生活を脅かすことのない、そんな日はもう日常になり得ないのだろうか。平和な日々。平和な沖縄。そんなレットルをはがしてあたりを見回してみると、今まで見えなかった色々なことが見えるようになった。今なお戦争が残した心の傷によって苦しめられている戦争体験者。軍用機の轟音により不安な思いをしている人々。滑走路を建設するためのジュゴンが棲む海の埋め立て。私のふるさと久米島にも、射撃訓練場となっている鳥島という島がある。射撃訓練による爆撃によって岩が削り取られ、クレーターのようになっていくという。また、過去には劣化ウラン弾が誤発射されるという事故もあった。環境への影響はないとされているが、住民の不安は拭えない。

祖父が平和を願ったこの空の下で、今もお苦しめられている人がいる。今もお不安な日々を過ごしている人がいる。それは、沖縄だけの話ではない。飛び交う銃弾と罵声に怯え明日を迎えられるかもわからない人々の悲鳴が、飢餓に苦しむ人々の呻きが、それでも懸命に生きる人々の叫びが、この瞬間も今どこかであがっているのだ。私たちに聞こえていないだけであって、私たちはその声を聞く努力をすべきなのだ。今ここに、何の不安もなく生きていられることが当たり前だと、そう信じて疑わない人々に警鐘を鳴らすべき

なのだ。そうではないのだと。戦争について知り、平和について学び、そして 平和な世をつくるために努力し続けなければならぬのだ。この「平和な世」の上にあぐらをかいて座っているだけでは「平和な世」は維持されない。それどころか脆く壊れてしまうだろう。だから私たちは、沖繩だけではなく、日本に、世界に目を向けて、ここ沖繩から平和への努力を広げていかなければならないのだ。現状を見つめ平和を常に模索し続けること。これが私たちのできる平和への努力だ。私は祖父が見上げたこの空を、平和を願ったこの空を、「真の平和な空」にして、次の世代へつなげたい。このどこまでも青い空に軍用機を見ることのない日を目指して、私たちは不断の努力を怠ってはならないのだ。